

建学の精神をめぐる三つの省察

——至誠心の神学から見た自由と愛——

延 原 時 行

はじめに

この度桃山学院大学「建学の精神」研究会にお招きいただき拙い講演をなす機会を与えられましたことは非常な光栄であります。心から厚く御礼申し上げます。貴大学の英語表記はSt. Andrew's Universityであります。そのことのなかに貴大学の依って以って立つ基本精神が勇躍躍如といたしております。主イエスの「我に従え」との召命に応えて出で立つ「シモンとシモンの兄弟アンデレ」の青春の気風そのままを映した命名と申しましょうか。その気風は以下の如くです。

「イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。イエスは、『わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう』と言われた。二人はすぐに網を捨てて従った。また、少し進んで、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、船の中で網の手入れをしているのを御覧になると、すぐに彼らをお呼びになった。この二人も父ゼベダイを雇い人たちと一緒に船に残して、イエスの後について行った。」(マルコ福音書 1 章16節—20節。新共同訳)

キーワード：建学の精神，至誠心の神学，自由と愛，Re-missio Peccatorum, mission/missions/evangelism

この気風に特徴的なのは、私は「すぐに」網を捨てて従ったという、その潔さにあると思います。そして、そのことは、実は私自身が中学三年生の時に「献身」の決意を固めた瞬間の感動とも関係して、了解されるのです。《我に従え！》SEQUIMINI ME! その呼びかけの何と感動的なことでしょうか。貴大学では、この主イエスの呼びかけ(Beruf/Calling)を学院章「アンデレ・クロス」(X字型の十字架)に刻まれています。そのことを含んで『桃山学院の「キリスト教精神」』という文章は、以下のように始まります：

「自由と愛の精神」

桃山学院の学院章には、“SEQUIMINI ME”(我に従え)という言葉が刻まれています。それはアンデレがイエスに従ったように、「自由と愛の精神」をもって生きることです。使徒パウロが書いています。

「あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。」(ガラテヤの信徒への手紙5章13節)

自由には他者への愛と責任がともないます。「自由」とはひとりひとりの人格と主体性を尊重すること、「愛」とは互いに仕えあいながら他者と共に生きることです。この「自由と愛の精神」はたんにキリスト教の立場だけではなく、すべての人間が一致しうる普遍的な理念であり、人類共通の目的です。

人間のそのような可能性を開花させながら、高い理想をめざしてチャレンジしつづけていくこと、それこそが桃山学院の一世紀を超える伝統がめざそうとする「キリスト教精神」であり、「世界の市民」への道なのです。

右の文章の最後のくだりについては、谷口照三教授の書かれた労作『『世界の市民』パラダイムの可能性——桃山学院大学の『建学の精神』の解釈と応用』が輝かしい光彩を放っています。私はV.《結言—「世界の市民」パラ

ダイムの可能性》の中の一節がことに好きです。桃山学院大学の「建学の精神」や「教育理念」が真に組織的な「英知」となり、「生きること」へと向けられた教育や研究活動が立ちあがってくる「知的枠組み」となることを願い、「自由と愛の精神にもとづく世界の市民」の意味内容を解釈してきた、という著者の意図説明に続く一節です。

「生きること」とは、「応答可能性を拓くこと」である。「応答可能性を拓くこと」とは、「信念に対する責任」を契機とする「レスポンスビリティ・スパイラル」を生きることを習慣化することである。このような「習慣化」を促進する契機となるのは、「協働」、つまり共に働いていく仕組みやパートナーシップ等についての理解と実践である。したがって、「世界の市民」は、『新約聖書』の「ヨハネの福音書」(3章16節)で述べられている「世の一人ひとりを愛する」という文脈でなければならぬことを、再確認する必要がある。また、「世界の市民」とは、「行動的シティズンシップを体得した行動的市民」の意味において了解する必要がある¹⁾。

私がこの一節がことに好きなのは、ヨハネ福音書3章16章の真実が著者の「世界の市民」論の中に滲み出してきているからです。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じるものが一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」の真実を谷口氏は、いわば存在論的下敷きにして、社会学的インテグレーションの再編成としての「世界の市民」構想を描いておられることは、素晴らしいと思います。福音を「世の一人ひとりを愛する」こととして社会学的インテグレーションの見地から再解釈す

1) 谷口照三「『世界の市民』パラダイムの可能性——桃山学院大学の『建学の精神』の解釈と応用」(『桃山学院大学キリスト教論集』第42号, St. Andrew's University, NII-Electronic Library Service, 20頁。

ることは、福音の存在論的真實の、私に言わせれば、滲み出しです。キリスト論的見地から言えば、世の一人ひとりがその独り子を世に賜った父なる神によって愛されているのでありますが、この神の愛の真實がこの世の社会的現実の中へと滲み出してこなくてはならない。そこに意を用いているのが谷口論文の凄さです。同様の凄さは、周知のように、賀川豊彦博士の「修繕」の思想実践に如実でありました²⁾。

2) 賀川の「修繕」の思想実践は、その生命のベクトルを「この信仰に入れば、もうわたしはわたしのわたしではなく、神のわたしとなるのである。」(『病床を道場として——私の体験した精神療法』福書房、1958年)というところに見出していた。その要諦は、夙に『イエス伝の教え方』(日曜世界社、1920年)に「宗教経験の極致」として賀川が見届けた「神がある以上、地球の上と交渉しないはずがない。そして神がイエスとして経験した生活は、また神が我々として経験する生活であらねばならぬ。」(37頁)という必然性にあつたのである。この必然性を私は本文中に谷口論文との関連で「福音の真實の社会的インテグレーションへの滲み出し」と呼んでいる。こうした賀川の基本姿勢が社会改良のかたちに関して賀川ハルの名著『貧民窟物語』(徳永書店、1920年)の以下の叙述を生んでいることを、鳥飼慶陽『賀川豊彦の贈りもの——いのち輝いて』(福岡・創言社、2007年)は指摘することを止めない：「貧民窟に対して従来は単に金銭物品の施与を以って貧民を救はんと致しました。勿論眼前の貧困はその慈善に待つでありませうが、これが根本の防貧策としては、住宅が改良され、彼等に教育なる物が普及され、飲酒を止めて風儀を改め、趣味の向上を計ることなどこれら、貧民窟改良事業を、労働運動に合わせて行ふ時に、今日の一大細民部落の神戸から跡を絶つに至ると信じます。私は神戸市民の覚醒により、貧民窟が改良される具体的改造を、切に願ってやまない次第であります。」(鳥飼、前掲書、69頁)

賀川夫妻の「修繕」「改造」思想実践は、神の命の私たちの命としての今此処における《滲みだし》に挺身するものであるから、「日本のすべての極限を成す部落問題」の性急な理想主義的解決(鳥飼慶陽『賀川豊彦 再発見——宗教と部落問題』福岡・創言社、2002年、120頁)とは色合いを異にする。

谷口氏が、NPOやボランティア組織で活躍している人々の「言葉」との出会いから学んだという「自分たちは人々の『想い』に気づき、それを『かたち』

右に見ましたように、福音の真実が社会学的インテグレーションの見地（例えば「世界の市民」構想）に滲み出してくるということは、逆に言えば、社会学的インテグレーションということは、それが思想的にも実践的にも出てくる前に、キリスト論的に福音の真実を前提にしているということでもあります。この見地からふと二首湧いてまいりました：

建学の精神出ずる一步前復活の主に弟子見（まみ）えたり

（備考：建学の精神元々Oxford, Leuven等欧州諸大学形成の源なり。それ今日にては日本のキリスト教諸大学にも伝われり。St. Andrew's University (桃山学院大学) その顕著なる一例なり。その建学の精神「自由と愛の精神」謳うなり。「自由」とはひとりひとりの人格と主体性を尊重すること、「愛」とは互いに仕えあいながら他者と共に生きることです。この「自由と愛の精神」は、たんにキリスト教の立場だけでなく、すべての人間が一致しうる普遍的な理念であり、人類共通の目的です。

ゝにしていくことが大切だと思っている」という姿勢は、私の言う「福音の真実の今此処における《滲みだし》」の具体的プロセス思想である。その委曲を尽くした以下のような説明は心憎い：「この言葉は、その背後に、その人達の活動が単なる援助ないし支援ではなく、『想い』を持っている人々との対等な関係で『同じ時』を共に生きているということ、そしてそのことに対するNPO等の人々の自覚と自負、と言ったものを感じさせてくれた。非常にシンプルな言葉であるが、それは『ニーズに応答する』ことの本質を言い表わしており、またその活動が『深遠で絶えることのない泉』のような特徴を帯びていることをイメージさせてくれる力を持っている。この心の構え」は、実に見事である。これは、まさに『マネジメントの基本』と言ってよい。また、この人達は直接意識はしていないと思われるが、『キリスト教精神』を端的に表現していると言ってよい。このように考えることができるならば、『キリスト教精神』を宗教の世界に閉じ込めることなく、日常の生活において足場となりうるように一般化できるのではないか、と覚えてならない。」（谷口「『世界の市民』パラダイムの可能性」、9-10頁）

／人間のそのような可能性を開花させながら、理想をめざしてチャレンジしつづけていくこと、それが桃山学院の一世紀を超える伝統がめざそうとする「キリスト教精神」であり、「世界市民」への道なのです。」かかる読みかへも可能なるも、原本的には、桃山学院の「キリスト教精神」の基づく基本テキスト「ガラテヤの信徒への手紙5章13節」に言ふ「自由」とは甦り給へる主イエスによる「罪からの解放」、詳しくは「罪人達の赦し即再派遣」RE-MISSIO PECCATORUMなりき（ヨハネ福音書21章1節—19節）。「愛」とは「我が羊を養へ」（ヨハネ福音書21章15節—17節）といふ主の招きに従ふことなりき）

汝（なれ）我をこれら物より愛するや問ひ給ふ主に従ふぞ道

（備考：新共同訳「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか。」（ヨハネ福音書21章15節。聖書協会訳も同様）は世紀の誤訳なり。復活の主イエスの問ひしは、「船や網一切の漁師の仕事に関わる物、ひいては宇宙全体を指して、これらの物より我を愛するか。」といふ根本的設問なりき。それをヒューマニズムによる愛の競争主義に貶めるべからず。宇宙より復活者を愛することは、復活者から宇宙人生全体を受け取り直す」（ケルケゴール）ことを意味するなり。これ——ケルケゴールの言ふ「反復」——「キリスト教精神」の原意なり。この原意「焚くほどは風のもて来る落ち葉かな」なる、良寛の一句に通底すること、知る人ぞ知る。宇宙人生須らく「風のもて来る」賜物なれば。この恩寵観を逸するならば、仮令愛を語っても地上的競争主義を脱し得ず、宇宙人生の第一歩で過つなり。ああ誤訳恐ろし）

かくして、存在論的に考察しますならば、「キリスト教精神」は「復活の主イエスによる弟子達の裏切り逃亡の罪の赦し即再派遣」RE-MISSIO PECCATORUMに究極的に関わることが明らかです。この主題を私は以下、三つの仕方で省察して見たいと存じます。

第一に、宣教学的に。ここではレスリー・ニュービギンの所論「Mission,

Missions, Evangelism」の三極戦略が非常に参考になります³⁾。

第二に、私の所論「至誠心の神学」の立場の闡明を通じて。ここでは20世紀後半か21世紀にかけて世界の宗教界・宗教学界・宗教哲学界・神学界の大きなうねりとなった宗教間対話（ことに仏教とキリスト教の対話）における最重要課題となった「二究極者（神と空）の問題」に対して私の「至誠心の神学」が一つの有効な解法を提供することをあきらかにします⁴⁾。

第三に、先のヨハネ福音書21章1節—19節のテキストに基づく説教「RE-MISSIO PECCATORUM：罪人達の赦し即再派遣」と詩「ペテロ」を開陳することによって純正キリスト論的に⁵⁾。

第一省察 RE-MISSIO PECCATORUMの宣教学的戦略論の見地 ——レスリー・ニュービギンの場合

初めに「建学の精神」を大学に関して論ずる論じ方にパラレルな現象として、明治のキリスト教文明批評家内村鑑三は「日本国」に関して「日本国の天職」という問題意識を打ち出したことを取り上げることから、レスリー・ニュービギンの宣教学にアプローチして見たいと思います。

海外に出ると、日本人は逆に日本を見つめ直すようです。私の場合も、内村の場合も、米国留学を端緒に見つめ直しが出て来たと言えましょうか。仮にこういう表現を用いるならば、日本人はなんだかんだと言っても「日本信仰」を持っているのではないかと、思われる興味深い事実があります。つま

3) 延原時行『至誠心の神学——東西融合文明論の試み』（京都・行路社、1997年）第三章「なぜ、東西融合の宣教学なのか？」参照。

4) 前掲書、第八章「空、ケノーシス、および慈悲——仏教的—キリスト教的至誠心の神学に向けて」参照。

5) 延原時行「Re-missio Peccatorum——罪人達の「赦し=再派遣」（『BAMBINO』第5号、1966年11月）参照。延原時行「詩『ペテロ』」（『BAMBINO』第22号、1968年6-7月）参照。

り、日本に関する何とはなしの信仰心、キリスト教で言う摂理(Providence)の信仰に似た何かを国の行く末全体に抱いている、とでも言えば、うまく言い表わしたことになるでしょうか。そこを内村はズバリ「日本国の天職」と言っているのけました⁶⁾。

天職(vocation, calling, Beruf)というのは、ご承知のように、十六世紀のルターの宗教改革の後、プロテスタント信徒達が世俗の職業の中に、マックス・ヴェーバーの用語で言う「世界的禁欲」を要求するような聖旨、聖務を観ずるようになった一大変革を含蓄する一語なのですが、これが今日の資本主義の倫理的発端を成した、などということは、すでに教科書的知識に属するので、ここでは触れません。私の注目したいのは、むしろ内村がこの概念を「日本信仰」に結び付けた宣教学的重要性なのです。思うに、内村は日本の命運を宣教学的に考察することを始めた最初の人として重要なのです。

「日本国の天職」なるものがあるとするならば、人々はこの使命観(ミッション)に押し出されて、次に、天職完遂のための様々に活動(ミッションズ)に勇躍従事することとなりましょう。そしてさらに、第三に、日本国の天職が奈辺に在るかをメッセージとして宣教し始めることでしょう(エヴァンジェリズム)。何のことはない、キリスト教宣教学で言う宣教学の構成要素が日本という国柄の行き方に関して成立するに至るわけです。

この類推は、現代西欧キリスト教界における最大のミッシオロジスト(宣教学者)の一人レスリー・ニュービギンの宣教学の三極戦略に関して正当です。彼によれば、ミッシオロジー(宣教学)の基礎概念は(右にすでに出していますが)三つあります。①「ミッション」(派遣=使命)、②「ミッションズ」(複数であることに注意されたい。様々な形態における具体的な宣教

6) 内村鑑三『地人論』第九章「日本の地理とその天職」(『内村鑑三信仰著作全集四』東京・教文館、1960年版、ことに92頁、——「日本国の天職いかに。地理学に答えて曰く、彼女は東西両洋間の媒介者なりと」。

師活動のことです), および③「エヴァンジェリズム」(伝道・宣教・布教)です⁷⁾。

第一のカテゴリーである「ミッション」(mission)は、ニュービギンによれば、主イエスのみ言葉「父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがた(弟子達)を遣わす」に呼応一致して教会がそのためにこの世へと派遣されている使命の一切・その全体性を表示します。言い換えるならば、宣教師を派遣するキリスト教国(欧米)の教会も含めた、全世界の教会の使命(ミッション)ということです⁸⁾。この意義での「ミッション」(天職)が、内村の場合、日本国の近代化(欧米との出会い)に応用されたわけです。

このことは、内村にとって、あるいは日本国そのものが「教会」の役割を担い、それに応じて自らの属する宗教グループとしては「無教会でいい」という信仰の内実を示していたのかもしれませんが。ことさらに西欧宣教師に教導されて「教会形成」などに一心不乱にならなくとも、団体的場なら日本国が既にあるじゃないか、後はただこれに純粹なるキリスト教精神の活を入れるだけでいい、というところに、彼の二つのJ(JAPANとJESUS)結合の真意はあったのかもしれませんが。

第二のカテゴリーである「ミッションズ」(missions)は、これもニュービギンによれば、今までそのような臨場現存(プレゼンス)がなかったか、ないしはあったとしてもそのような臨場現存を生ぜしめるということを主要な意図とするところの、「ミッション」全体内部における特定の実践的企図および事業を表示します⁹⁾。言うまでもなく、これが右にも触れた普通の意味での宣教師活動を指すわけでして、我々のここでの文脈では、内村的「日本国の天職」から言いますと、天職完遂のための国の様々な任務=活動(特

7) See Lesslie Newbigin, "Cross-Currents in Ecumenical and Evangelical Understandings of Mission," *International Bulletin of Missionary Research*, 6/4, October 1982, 146.

8) Ibid.

9) Ibid.

に政治・経済)がこれに該当することになります。

第三のカテゴリーである「エヴァンジェリズム」(evangelism)は、引き続きニュービギンの見解を引けば、イエスについての福音の——書かれるにせよ、直接語りかけられるにせよ——言語的伝達でした¹⁰⁾。この面では、イエスのみ名が名指しされない限り、エヴァンジェリズム(宣教・布教・伝道・布教)はないことであろうと思われまふ。我々のここでの問題連関つまり内村の「日本国の天職」では、エヴァンジェリズムはさしずめ日本の心(旧い言い方だと日本精神、鈴木大拙の高名な書名で言えば「日本的靈性¹¹⁾)の解き明かしにかかわるものとしてのジャパノロジーということになりまふしょう。

第二省察 私の至誠心の神学の立場——その三原理

レスリー・ニュービギンの所論は宣教学の欧米文明の戦略論としての面白さを浮き彫りにしてくれている点が有益ですが、我々の問題にするRE-MISSIO PECCATORUM(罪人達の赦し即再派遣)という純正キリスト論的事実/動態そのものをその根底から根源的存在論的に省察する深さはありません。弟子達のイエスに対する無理解により、彼らは皆イエスに躓きます。復活の主イエスが彼らの代表者ペテロに「これらの物(船や網、要するに空からの古い仕事の総体を意味する。延いては宇宙全体)以上にわたしを愛するか。」と問いかける時、この問いかけは何処から出てきているのでしょうか。彼らを無限に赦す愛から出てきているのでしょうか。ではこの愛は何処から出てきているのでしょうか。父との関係から出て来ています。では、イエスの父との関係とは、根本的に言って、どのような様態のもののでしょうか。こう問い詰めてゆきますと、我々はイエスの(父に対しては)見者=覚者であると

10) Ibid.

11) 『鈴木大拙選集』第一巻(東京・春秋社、1964年版所収)。

もに（弟子達にたいしては）宣教者である二面性に直面します。イエスの実存のこの二面性は、マタイ福音書5章48節に最も明示的です：

「だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全なものとなりなさい。」

イエスは、あなたがたの天の父が「完全」《teleios》であることを見る方であると同時に、「あなたがたも完全な者となりなさい。」と呼びかける存在者です。では、父が完全であるとは、どういうことでしょうか。「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせたださるからである。」（45節）とあります。ここにイエスによって描かれている父の姿を「すべてを包む方」《The All-Inclusive One》と捉えてもいいでしょう。では、すべてを包むという現実的在り方は何処から出てくるのでしょうか。すべてを包む関係性そのものに父が至誠であるところからではないでしょうか。では、すべてを包む関係性とは何でしょうか。ここにおいて私は、「仏教とキリスト教の対話」の中で深く学び得た大乘仏教の理論的基礎構築者である龍樹（ナーガールジュナ）の思想を大切に思います。龍樹はすべてを包む関係性を「空」《Sūnyata》と呼びました¹²⁾。そして、「空は空自らを空ずる」無自性のダイナミズムだとも。父は空即関係性に至誠であり給うからこそ、言葉（ロゴス）を通じて「汝らも至誠であれ。」と招喚されます。

こうして、私は今、私の言う「至誠心の神学」の三原理を明らかにしました¹³⁾。

12) 延原時行『ホワイトヘッドと西田哲学の〈あいだ〉——仏教的キリスト教哲学の構想』（京都・法蔵館、2001年）第五章「原理の現実への変換はいかにして可能化」、第三節「ナーガールジュナ」、特に199-208頁参照。ロシアの仏教学大家スチュエルパツキーは龍樹著『中論』に出てくる「空」《Sūnyata》解釈の中でこれを“relativity”と訳している（See Theodore Stcherbatsky, *The Conception of Buddhist Nirvana* [New York: Samuel Weiser, Inc., 1978], pp.97-100, 196-222.）。

13) 延原、前掲書『至誠心の神学』163頁参照。

- ①神（父）は空に至誠である。God is loyal to Emptiness.
- ②空は空自らを空ずる。Emptiness empties itself.
- ③神は宇宙において我々被造者に至誠心を喚起することの出来、かつ現に喚起するところの唯一の御方である。God is the only One in the universe who can and does actually evoke loyalty in us creatures.

私の至誠心の神学において、神は空に至誠である「自由」を有する御方です。空は、キリスト教神学では、内三位一体的場の事として、そうだとすれば、三位（父、御子、御霊）の相互内住の愛の事です。この愛に父は至誠でいます。子もこの愛に至誠でいます。その時父と子の相互内住・相互至誠は内三位一体的愛の霊格化を必然的に伴います。これが聖霊なる神です。父も子も「聖霊」を生むと言えましょう。

さて、父は内三位一体的愛に至誠でいますので、子に同様に至誠であれよと呼びかけられます。子は、「至誠であれよと呼びかける父の言葉」《Verbum》のままにある方「ロゴス」です。従って、父が内三位一体的関係性（愛＝空）に至誠であることによって、被造者に至誠心を求め給う時、ロゴスによって観られ且つ媒介されて「我々被造者の心の内に至誠心を喚起することがお出来になる」と言うことが出来ます。

ロゴスが父の至誠なることを観ること、父の至誠心を見つつこれを己のロゴス性によって媒介すること、は①ロゴスの父への愛であり、②ロゴスの自由な決断として我々への愛です。復活の主イエスは①父への愛の内に、② RE-MISSIO PECCATORUM「ロゴスの自由な決断として我々への愛を、汝らも父の如く至誠であれよと喚起することにおいて、表し、このことにおいて罪赦し＝再派遣される御業」を成就されるのです。こうして私の「至誠心の神学」からRE-MISSIO PECCATORUMという純正キリスト論的事実/動態が根源的存在論的に基礎づけられました。

**第三省察 説教「RE-MISSIO PECCATORUM」(罪人達の赦し即再派遣)
と詩「ペテロ」——純正キリスト論的事実／動態の省察と「うた」**

第一省察と第二省察の省察に依拠しながら、ここでは「RE-MISSIO PECCATORUM」(罪人達の赦し即再派遣)の真実・動態を「説教」と「詩」のかたちで純正キリスト論的に省察・叙述して見たいと存じます。実は、これら二篇は個人誌『BAMBINO』第5号(1966年11月)および第22号(1968年6-7月)に掲載されたのでありますが、実際には貴「建学の精神」研究会(2013年2月19日)において初めて朗読されました。その折、滝澤武人教授より、桃山学院大学『キリスト教論集』第48号(滝澤武人教授退任記念号)に掲載したい旨御依頼を賜ったのでありました。先生の永い教授生活のメの意義ある『論集』に拙い説教と詩とを以って参加させていただきますことは、今回講演にご招待いただきましたことと併せまして非常な光栄に存じます。心より厚く御礼申し上げます。

付論Ⅰ：Re-missio Peccatorum—罪人達の「赦し＝再派遣」

そののち、イエスはテベリヤの海べで、ご自身をまた弟子たちにあらわされた。そのあらわされた次第は、こうである。シモン・ペテロが、デイドモと呼ばれているトマス、ガリラヤのカナのナタナエル、ゼバダイの子らや、ほかのふたりの弟子たちと一緒にいた時のことである。シモン・ペテロは彼らに「わたしは漁に行くのだ」と言うと、彼らは「わたしたちも一緒に行こう」と言った。彼らは出て行って舟に乗った。しかし、その夜はなんの獲物もなかった。夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。しかし弟子たちはそれがイエスだとは知らなかった。イエスは彼らに言われた、「子たちよ、何か食べるものがあるか」。彼らは「ありません」と答えた。すると、イエスは彼らに言われた、「舟の右の方に網をおろして見なさい。そうすれば、何か取れるだろ」。彼らは網をおろすと、魚が多くとれたので、それを引き上げることができなかった。イエスの愛しておられた弟子が、ペテロに「あれは主だ」と言った。シモン・ペテロは主であると聞いて、裸になっていたため、上着をまとって海にとびこんだ。しかし、ほかの弟子たちは舟に乗ったまま、魚のはいつている網を引きながら帰って行った。陸からはあまり遠くない五十間ほどの所にいたからである。

彼らが陸に上って見ると、炭火がおこしてあって、その上に魚がのせてあり、またそこにパンがあった。イエスは彼らに言われた、「今とった魚を少し持ってきなさい」。シモン・ペテロが行って、網を陸へ引き上げると、百五十三びきの大きな魚でいっぱいになっていた。そんなに多かったが、網はさけないでいた。イエスは彼らに言われた、「さあ、朝の食事をしなさい」。弟子たちは、主であることがわかっていたので、だれも「あなたはどなたですか」と進んで尋ねる者がなかった。イエスはそこにきて、パンをとり彼らに与え、また魚も同じようにされた。イ

エスが死人の中からよみがえったのち、弟子たちにあらわれたのは、これで既に三度目である。

彼らが食事をすませると、イエスはシモン・ペテロに言われた、「ヨハネの子シモンよ、あなたはこれらの物以上に、わたしを愛するか」。ペテロは言った、「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたをご存じです」。イエスは彼に「わたしの子羊を養いなさい」と言われた。またもう一度彼に言われた、「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」。彼はイエスに言った、「主よ、そうです、わたしがあなたを愛することは、あなたをご存じです」。イエスは彼に言われた、「わたしの羊を養いなさい」。イエスは三度目に言われた、「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」。ペテロは「わたしを愛するか」とイエスが三度言われたので、心をいためてイエスに言った、「主よ、あなたはすべてをご存じです。わたしがあなたを愛していることは、おわかりになっています」。イエスは彼に言われた、「わたしの羊を養いなさい」。よくよくあなたに言っておく。あなたが若かった時には、自分で帯をしめて、思いのままに歩きまわっていた。しかし年をとってからは、自分の手をのばすことになろう。そして、ほかの人があなたに帯を結びつけ、行きたくない所へ連れて行くであろう」。これは、ペテロがどんな死に方で、神の栄光をあらわすかを示すために、お話しになったのである。こう話してから、「わたしに従ってきなさい」と言われた。

(『ヨハネ』21・1-19. 日本聖書協会訳1954年改訳。訳文に引用者による改変あり。)

序

ある日曜日、いつものように数名の友達¹⁾と川西の山野を散策しました。時は秋、日は昼下がりに、真っ青な空と金色の穂並みそして緑これ一色のなかにちりばめられた紅葉を踏みしめて歩きました。語り合いながら。

歩き疲れてゴルフ場の芝生の上で眠ってから、山を下って、とある喫茶店

に赴きました。アスファルトの上で思い出したコーヒーを求めたのです。

私たちは話し合いました。砂糖とミルクとコーヒーの中に入れながら。と、そのとき、私はre-missio（レ＝ミッシオ）なるラテン語の単語を思い出したのです。

Re-missio peccatorum—レ＝ミッシオ・ペッカートルム。罪人達の赦し。ルターの言葉です。

しかし、このとき、私はre（レ）とmissio（ミッシオ）をハイフンで結びながら思い出していたのです。Missio（ミッシオ）とは、英語ではmission（ミッション）です。ミッション・スクールの「ミッション」、ミッシヨナリーの「ミッション」、つまり、宣教ということです。しかし、元はと言えば、「派遣」という意味なのです。つまり、missile（ミサイル）の「ミッシオ」ですね。

それにre（レ）を付けたらどうか。Re-missio（レ＝ミッシオ）、つまり、「再派遣」ということなのです。

躓いても転んでも、裏切っても逃げて、繰返し繰返し派遣される。正にこれこそre-missioの意味するところではないでしょうか。

そうだ！（私は喜びに叫んでいました。）してみれば、remissio peccatorum（罪人達の赦し）とは、罪人達を繰返し繰返し派遣される以外の何事であろうか、と。

——こうしてその夜遅く私は、『ヨハネによる福音書』21章の、復活のイエスと弟子ペテロの対面の記事を意義深く思い出し、耽読したのであります。

第一節 絶望の夜明け初める

この記事に我々が見るのは何でしょうか。正にre-missio peccatorum（罪人達の再派遣）ではありませんか。

冒頭にこうあります。

「そののち、イエスはテベリヤの海辺で、ご自身をまた弟子たちに現わされた。」（『ヨハネ』21・1）

それがすべてを包括しています。

そこはテベリヤの海辺であったのです。ガリラヤ湖と呼ばれ、キンネレテの湖と愛された海、実はこれは、弟子たちが最初に召し出された場所でした。舞台はふたたび振り出しに戻っていたのです。

シモン・ペテロ、デドモと呼ばれているトマス、ガリラヤのカナのナタナエル、ゼベダイの子ら（ヤコブとヨハネ）。他の二人の兄弟たち（たぶんアンドレとピリポ）。彼らは今や、故郷に、以前の職場に、生活の座（Litz im Leben）に帰っていました。しかし、それはけっして喜ばしい帰還ではありませんでした。彼らはけっして故郷に錦を飾ったではありません。

彼らは師を裏切り、逃亡してきていたのです。

人が特別な場所での特別な時間（責任の時間と場）を逃れて、生活の安楽に取って返し、それで人生万々歳と思うこともあります。彼らの日常は、驚くほど波風の立たないものであり、生活に何の異常も認められません。しかし、実は、その背後に黒い黒い罪の時間が、裏切りの時間が、逃亡の、欺瞞の、過去が横たわっていることもあるのです。そして日常の平凡と平和にもかわらず、実は、彼らの現在は、この過去の暗黒から片時も逃れられないで、白々しく喘いでいるのです。

夜は明けようとしていました。

シモン・ペテロは仲間に、「俺は漁に出るぞ」と言いました。彼らも「俺たちも一緒に行くよ」と立ち上がりました。

仕事の日を始めよう。彼らは出て行って舟に乗ったのです。しかし、彼らは本当に仕事を始めたのでしょうか。人間が過去の暗黒から自分を切り離そうとする時、なぜかがむしゃらに仕事に突進するのですが、本当に仕事をしているのでしょうか。自分の実存の底からと言えるほど、仕事をしているのでしょうか。

しかし、「その夜は何の獲物もなかった」（『ヨハネ』21・3）のです。

彼らは絶望的なほど、仕事を失っていたのです！ 具体的な果実を通して

自分の人生の健康を知らされるというのが、人間の実際経験の意味だとすれば、この[・]実[・]りの[・]な[・]さは何でしょうか。彼らは改めて具体的に自分たちの罪を確認していました。

実りのない仕事の絶望！ それは人間の絶望の真相そのものではありませんか。「生きる理由があるならば、人はどんな事態にも耐えられる」（ニーチェ）。しかし、その生きる理由を、自分自身の裏切りによって暗黒の中へと葬ってしまった場合はどうでしょうか。絶望だけが大口を開けて待っているのです。

弟子達の罪は軽いものではありません²⁾。それはたんなる道徳的な罪（実は、そんなものは存在しないのですが）ではなかったのです。それは、「わたしに従え。君達を人間をすなだる漁師にしよう。」（『マルコ』 1・7）とイエスによって召喚された全く新しい仕事、天地始まって以来の高貴なる務め、旧約聖書でも新約聖書でも「嗣業」と呼ばれている神聖なる仕事、を放棄し、冒涇することであったのです。ユダの裏切り！ ペテロの三度にわたる否認！ 弟子たちすべての逃亡！ 彼らは同じ一人の方、彼らの主イエスを裏切ることに於いて、この罪をはたらいていたのです。そして、裏切られた主イエスは十字架に架けられたのでした。

ユダは自殺しました。彼は「わたしは罪のない人の血を売るようなことをして、罪を犯しました」と叫びましたが、祭司長たちが「それは、われわれの知ったことか。自分で始末するがよい」（『マタイ』 27・4-5）と突き放した時、自分で自分を始末すると言う「道徳的自我の道」を、悲惨にも祭司長たちの言葉に誘惑されて、突進してしまったからです。罪を犯した時、自我しか残っていない人は、すべてユダの末路をたどるほかないのです。

ペテロは激しく泣きました。それは、「たとい、みんなの者が躓いても、わたしは躓きません」（『マルコ』 14・29）と断言した道徳的自我が今は全面的に崩壊していたからです。いや、それだけではなく、さらに、「鶏が二度鳴く前に、三度わたしを知らないと言うであろう」と言われた、人間の深層を洞察されるイエスの言葉を思い出し、そして思い返していたからなのです。

(『マルコ』14・72)。ペテロは自我が跡形なく瓦解したのち、イエスの言葉(それ自体が、ペテロよりも先にペテロの未来的実存を言い当てる意味で、未来的成就への矢である言葉)の中で泣いていたのです。自分の失敗よりも先に未来的成就への矢である言葉がないところでは、人は泣けません。

そして、ここにだけ人間のいのちの再生点はあるのです。なぜなら、ペテロの裏切りへのイエスの洞察と予告の前に——それに先行して！——彼の復活の予告は確言されていたのですから。

「君達は皆、私に躓くであろう。『私は羊飼いを打つ。そして、羊は散らされるであろう』と書いてあるからである。しかし私は、甦ってから、君たちより先にガリラヤへ行くであろう。」(『マルコ』14・27-28)

ペテロがもし、イエスの言葉を想起していたのなら、この復活の予告も想起していたことでしょう——どんなにうすぼんやりした形であったとしても。しかし、この想起は、単なる想起に止まるものではありません。イエスの言葉の場合、事柄が未来に関する事なのですから、過去の想起は未来への待望になるのです。ここにイエスの言葉の想起の「冒険的性格」が隠されています。それは、イエスの言葉の真実の主体であるロゴスが片時も過去へと流されてゆく無常ではなく、パウロの未来における現在——そういう意味において「過去から未来における現在への冒険」——であり給うからです。いま、「過去から未来における現在への冒険」と申しましたが、実は、この「この冒険」が本説教の主題である「復活」の言い換えなのでありまして、冒険的でない復活は考えられません。

こうした事情から、過去の深い回想は、必ず未来へと冒険するのでありまして、我々は過去を回想しながら、想起しながら、来るべき未来へと「身を乗り出して」(ピリピ書3章13節)、「未来(冒険者キリスト=復活者キリスト)のうちに自分を見出す」(同9節)のであります。それこそ、実は、ケルケゴールの言った「反復」(己がいのちの神の御手からの受け取り直し)の意図するところなのであります。

そして、これのみが、笑りのない仕事の絶望の只中にあっても、なおも彼

ペテロたちに漁に出て行く勇気をあたえていたに違いありません。勿論、彼ら自身の仕事はあくまでも実りのないものであり、彼らはあくまでも絶望以外ではなかったのですけれども。

あたりは白み始めていました。

第二節 見知らぬ人の呼びかけによる仕事の回復

「夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。」(『ヨハネ』21・4)

その意味は何でしょうか。夜が明けた時、初めてイエスが岸に立たれたのでしょうか。いや、いや、夜が明けたので、立っておられるイエスが照らし出されたのです。

「しかし弟子たちはそれがイエスだとは知らなかった。」(同上)

実在(イエス)が無限に人間より先行して実在されるにもかかわらず、それを悟らない人間の絶望的無知! それ故のあらゆる根拠のない徒労! もはや冗談か漫画でしかない人間の絶望! しかし、それでもこれが人間の生活の実状なのです。必要のない徒労であり、絶望かも知れません。いちはやくそのようなものはやめるべきでしょう。しかし、どこから、この徒労(実りのない仕事)と絶望(目当てのない希望)の孤独が破られうるのでしょうか?! こんなにも自己の殻の中に閉じこもっているのに!

しかし、見知らぬ方は尋ねられたのです。「おい、君たち、獲物はとれたかね?」(5節)と。それはごく普通の浜辺での朝の挨拶でした。彼らは徒労と絶望の中から答えます。「いやあ、全然ですよ。」(『ヨハネ』21・5)

こうして、(彼らは気付きませんでした)対話が始まっていたのです。偉大な対話が! 朝の漁師のぶっきらぼうな挨拶のなかで、永遠の汝との出会いは気付かれずに進行していたのであります。そして、この対話・出会いは

こそ、今日でもどこにでも輝くところの現実なのです。（私は最近、日常のすべての会話のなかにこれを覚えます。感動的です。）現実は今や、輝いていました。朝ぼらけの海のなかで。陽は正に昇りつつあります。そして、彼らは、この語りかける見知らぬ方によって、さらにさらに対話・対面・出会いの一つの現実へと巻き込まれてゆくのです。

見知らぬ方は、突然、「舟の右の方に網をおろしてみたまえ。そしたら取れるよ」と言いました。彼らは、網をおろしました。この見知らぬ人となぜか息が合ったからです。おびたらしい魚！そこに彼らが見たのは、実りのある仕事、充実した人生以外の何だったのでしょうか。

その実感！「回復した仕事！ 充実した人生！ これを私たちは失っていた。しかし、今ある。ここにある！」そのように直覚した弟子、イエスの愛しておられた弟子ヨハネは、ペテロに向かって叫びをあげたのです。「あれは主だ！」（『ヨハネ』21・7）と。

今日でも繰り返しそうであります。人が地上での日常の仕事のなかで豊かな実り、生の充実に含まれる時、それがどんなにいわゆる「世俗的」な所での出来事であっても、「あれは主だ！」という喜びの叫びが挙がるのです。復活の力の顕現なしに、この世において命の充実の出来事が起こるはずはないのでありますから。

カトリック司祭であり、古生物学者、『現象としての人間』という世紀を画する大著で死後益々人々に大きな影響を及ぼしているフランス人ピエール・テイヤール・ド・シャルダンが証言します。

「五十年以上の間、わたしの運命（好運）は、ヨーロッパやアジアやアメリカにおける職業上の親密で打ちとけた接触によって、人間の本质[文明の価値]という点でこれら多様な国々において一番大事な、一番影響力のある、一番活発な力を持つものとこれまで考えられ、また現在も考えられていることに触れさせてくれた。さて、こういった思いがけない例外的な接触は、イエズス会士としてのわたしを（つまり教会の中心に

おいて成長したわたしを), 自由な思想と研究のもっとも活発な地域に深く入り込ませ, わが家にいる時のように気がねなく働くことを可能にしてくれた。これらの接触のおかげで, さきに述べた二つの世界の片方だけしか経験していない人々には感じにくい若干の事柄が, わたしにはきわめて明白に見えるので, さらに声を大にして叫ばずにはおれなくなるほどだった³⁾。」

では, その若干の事柄とは何でしょうか。

「世界の歴史は, 現実世界を構成するすべての繊維が, 雑然と混合し合うことなく, 人格的で, 普遍的なキリスト (引用者注。シャルダンはそのをテロス [終局=目的] とかオメガ点とか呼ぶ。彼の進化論の核心である。『エペソ』 1・10参照) に向って収斂している広大な宇宙生成の歴史として姿を現わす。自己の信仰箇条の本質と自然の空間=時間的関連性とを同時に理解するキリスト教徒は, 厳密な意味で (隠喩的な意味でなく), 自らのあらゆる働きを通して, また無数の他の人々と共に, 精神的的一致という唯一の行為に入りうる恵まれた位置に立っている⁴⁾。」

具体的な地上の仕事 (新しい文化の形成, 地上の生への困難苦闘を通じての愛, ヒューマニズム, そこから出てくるベトナム反戦!) の中で精神的一致が, すなわち, 真の受肉が始まるのです。そうして見えないが, しかし, 活動されるキリストへと, すべての国の真摯なはたらき人の人格の中心が, 仕事の格闘の中で, 収斂し移行する時, 「宇宙生成は, 一挙に人格の形をおびることになる。このようにして宇宙生成は, もっとも調和しがたい, もっとも不明瞭な不可避の事象に至るまで, 引き寄せて完全なものにする最高の極 (=キリスト) との数知れない接点を一挙に形づくることになる。突然放出された愛の流れが世界の表面全体と深層に広がる⁵⁾」のです。

私は, イザヤの預言「そは水の海をおおえるごとく, 主を知る知識, 地に

満つなければなり。」(イザヤ書11章9節)を想起せずにはおれません。

現代進化論の最先端で、シャルダンによって提言された「宇宙的キリスト論」は、「あれは主だ!」という新しいキリスト発見の叫び声だったことに、こんにち賛同する人々は地球上に多いのであります。

第三節 罪人たちの赦し＝再派遣 (Re-missio Peccatorum)

「あれは主だ!」暗かった現実のなかで、突然、稲妻のように直進する直覚! 想起! 歓声! ペテロは主であると聞いて、裸になっていたため、上着をまとして海に飛び込みます(『ヨハネ』21・7)。直覚の人、ヨハネ。行動の人、ペテロ。両者相俟ってイエス発見へと赴いたのです。

しかし、その方イエスは、物静かに朝の海辺に座り、食事の支度を整えておられました(9節)。炭火と魚とパンがそこにありました(9節)。そして、言われました。「君、今取れた魚を少しもって来なさい」(10節)。

彼らはそこで、153匹もの大魚たちを網からピクに入れるために、かいがいしく働き始めました。じっとそれを見つめるイエス。そして、言われました。「君達も、たってばかりいないで、食事をしなさい」(12節)と。お許しが出たので、彼らもイエスの周りに座ってガツガツ食べ始めました。何しろ暗いうちから働きづめで腹は減っていました。イエスは弟子たち一人一人にパンを裂いて配って廻られました。そして、魚もよく焼けたのから皆に配って廻られました(13節)。

誰も、「あなたはどなたですか」と進んで尋ねるものはいません(12節)。不立文字、朝の食事。彼らを、もうかなり高く昇ってきた朝日が暑いくらい照らしていました。

彼らが食べ終わった頃、イエスはペテロに向かって言われました、「ヨハネさんとこのシモンよ、君は(辺りを見廻しながら)これらの物⁶⁾(つまり、舟や網や漁業そのもの——ペテロが今見ている彼の生活必需品とそれらに

よって意味されている「旧い生活」, 「イエス随順以前の旧い仕事」 「宇宙人生もう一度を知らぬ旧態依然」) を愛する以上にわたし (復活者) を愛していますか?」ペテロは復活後はじめての主の語りかけに一気に答えました, 「主よ, そうです。(もう以前のように自我に立脚して「ほかの者が裏切っても断じて私はあなたを裏切りません」と主張した時とはちがって) 私があなた (「宇宙人生もう一度」への召喚者なるあなた) を愛していることは, ご存知の通りです」と。その時, ペテロは, 宇宙人生を自分の物としてではなく, 復活者から「もう一度受け取りなおすべきもの⁷⁾」として直覚していたのであります。

無限に先行して対応してこられる主イエス! その愛! ペテロはもうはじめから分かっていました。「主は, どんなに私が愛しているか——どんなに私が受け取りなおしの人生の主である方を信頼しているか——をご存知だからそう聞かれたのだ」と。だから, そのままを答えたのです。

愛が芽生えて動いている時, いちはやく察知して訊ねるもう一つの愛。訊ねられた時に, 見抜かれた驚きと喜びからこたえる愛——それは, 相手の, 自分への察知を, 察知している愛であります。この愛に在ってひとは, 旧態依然から脱し, 「宇宙人生のもう一度」へと, 復活者からの「宇宙人生の受け取りなおし」へと, 飛翔しているのであります。愛は, このとき, 言語以前に, 相互察知の心でありました。それを言葉が, 対話が, 再演し, 真面目にも遊戯化して行きます。それ故, 私達の心に主イエスへの愛が——ことに具体的な仕事のなかでのうめきとして——燃え上がる時, 「こんな取るに足らぬものが知られるであろうか」などと, 形而上学的疑問を提出する必要はないのです。

ペテロがそのように答えた時, イエスは簡単に「わたしの子羊を養いなさい。」と言われたのでした。それは何事だったのでしょう? ペテロに今や, 彼が裏切りのためにそこから脱落してしまっていた, あの大きいなる使命, 聖なる任務が回復された以外の何物でもないのではないのでしょうか。イエスとの対面・対話のなかから言われてきたのは, これなのです。そして, そのと

き、この対面・対話のなかで、まさにその現実性のなかで、ペテロが今、人間回復されていたのであれば、彼が子羊を養うとは、かかる対面・対話の現実性を今度は、彼がああのイエスのなされたように自分の人間仲間のなかで、実演して行く以外の何であるでしょうか。

いずれにせよ、この対面・対話のなかで不立文字の赦しを感得していた時、それはすぐさま「派遣」に通じていたのです。そして、ペテロにとって、一度裏切ったのに「再び派遣されるという事」ほど、リアルな赦しはなかったでしょう。これを見る時、キリスト者の「赦し」の観念化は、前方未来にある具体的仕事に向かって再派遣されていることを悟っていないことから来るものとして、深刻に自己批判されるのです。

実際、私達は恩寵によってのみ救われると同時に、仕事において救われるのです。そして、両者は一なのです。

私は、前号（『Bambino』第4号、1966年10月）では、これを「仕事性」（恩寵＝訓練）と書きました。ここではさらに声高らかに“Re-missio Peccatorum”（罪人達の「赦し＝再派遣」）と叫びたいのです。

現在（1966年11月現在）毎週同志社大学神学部で聴講している、エドゥアルト・シュヴァイツァー博士が講義のなかで「使徒（apostle = apostolos）は十二弟子にのみ限定される所謂使徒職ではなく、初代教会の機能（function）そのもののことである」と明言されるのを感動を以って拝聴したのでした。であれば、罪人達の再派遣も正にそうです。いいましよう、それは教会の機能そのものである、と。

第四節 人間的共同的命の泉ここにあり

イエスは、同じ問いをもう一度、そしてさらにもう一度ペテロに対して繰り返されました。それはさながらペテロの三度のキリスト否認（『ヨハネ』18・17, 25, 27）を三度悔い改めさせ、弟子職を回復させ、再派遣する愛情の行為であるかのようにあります。正にそうであります。そして、同じ答えをペテロは三度することを許されたのであります。

この何かドラマの如く、物言わない（然り、一切ペテロの裏切りやその赦しに付いて喋喋しない）「言葉の行動」！そこに私は、言葉はいかに使うべきか、という智慧を深く教えられます。これを私達は日常生活の中で忘れるべきではないのです。私達の言葉といたら、すぐに独断的なイデオロギーになってしまって、一切人間仲間（ともだち）という現実に対面する「現実性」という態度を失っています。時に強がって猪突猛進するかと思えば、的外れな言葉の鉄砲を打った後、すごすごと引き返すだけなのですから。対面・対話という現実へのへりくだりを失った単なるイメージ作りとレッテル張りの言葉は、悲しいことに、いつも饒舌なのです。あのざらざらした感じ！金属製の響き！

しかし、イエスは何を語るべきか、何を語らざるべきか、の慎みを明確に意識されているようです。ここに、彼の言葉の無限の秘密があるようです。

彼のこの三度リフレインされた言葉の行動に輝いている、現実のなんと豊かなことでしょう！ここに無限の奥行きを私は感じます。

最初に、ペテロに養うように言われたのは、「小羊」(arnia=アルニア)、次は、「若い羊」(probatia=プロバティア)、そして三度目は、「羊の群全体」(probata=プロバタ)でした。弱いものから順々に庇護指導しなさい、ということでしょう。イエスの憐れみは滲み出ていました。

ここに、人間の共同の生・対面・対話の汲み尽くせないほど豊かな「泉」があります。イエスが弟子達を再派遣されたとき、彼は決して固形物のようになった「赦し」の観念化石を輸送し、宣伝することを望まれたのではないでしょう。むしろ、再派遣の「源」である、あの対面・あの対話をこそあらゆるところで「再演」し、「再発見」することを望まれたのではないのでしょうか。

私は著者が『ヨハネによる福音書』の20章までの本文を書いてから、この21章を付録的に書き加えている事実に、深い意味を認めるものです。注解者たちによれば、これは、復活の記事でも、ガリラヤ伝承によるものです。20章に書かれているのは、エルサレム伝承です。

21章1節の冒頭の言葉「そののち」や、14節「イエスが死人のなかから甦ったのち、弟子達に現れたのは、これですすでに三度目である。」を見れば、ガリラヤ伝承の方がエルサレム伝承より後のような印象を受けますが、『マルコ福音書』14章28節でのイエスの預言「しかし、わたしは甦ってから、あなたがたより先にガリラヤに行くであろう。」を参照するとき、それはヨハネ福音書記者が21章を付録的に付加した結果の、成り行きによる間違いかも知れません。24節を見ると、本文もこの21章も、「イエスの愛しておられた弟子」ヨハネが、著者長老ヨハネ（彼は十二弟子のなかには入っていなかったけれども、さらに広いサークルで、イエスの弟子であり、使徒ヨハネの書記を務めた）に書き取らせたものと思われます。

ことに21章という「付録」を一応完結していた「本文」に書き加えた事実は、弟子ヨハネ（恐らくヨハネ福音書を書いたとき、十二弟子のうち唯一人生き残っていた）がいかにかこのイエスのペテロ達への対面・対話を重要視していたかを物語っています。この記事は、『マルコ福音書』の末尾にも付加されていたが、いつか脱落し、『ヨハネ福音書』にのみ保存されていると考えられています。『ルカ福音書』にも、5章に、同様の記事が見られますが、これはガリラヤ復活伝承が弟子達の最初の召命の記事に嵌め込まれたものと考えられます。

いずれにせよ、『ヨハネ福音書』のガリラヤ伝承がなければ、どうしてあの恩師を裏切って逃亡したペテロが初代教会の指導者として立ち直り、なおかつ、『使徒言行録』にあるような、「主イエスの復活について非常に力強く証しをする」（『使』4・33）ことになったのか、理由が分からないでしょう。

ともかく、私は、先程も書きましたが、ここに、対話の「源泉」を認めざるを得ないのです。それが復活のイエスが啓示された「人間たるの基本的生」です。私達はこの「基本的生」を忘れてはなりません。仏教の禅宗では、釈迦の教説の前にある、彼の生きた生を「坐禅」として捉え、それを「行」じていることについては、前号（『Bambino』第4号）で触れました。前号では、私は、「訓練形態」という語を用いたのですが、それはここで言う「基本的生」

を今此処で生きるためです。そして、それは「対話」であったのです。「対話」のなかでペテロは命と仕事を回復させられ、そして、私の信ずるところ、「対話」へと再派遣されたのでした。

さて、「対話」の現実のなかでは、マルキストも、仏教徒も、キリスト者も、その他どんな主義主張の人も、ただその現実に現実的になろうとしてそれぞれの伝統や思想の「通路」から試みればいいのです。伝統、思想、宗教、——これらは皆、「対話への通路」なのです。そして、この試みは、復活の主イエスが先ず先導しつつあるところの、「基本的生」なのであります。キリスト教的に考えますと、それのみが、真のモラルであり、そこに今や、宇宙人類の未来は明け初めようとしています。「宇宙人生」にはつねに「もう一度」のチャンスが待っているのです。それを忘れて、私達はキリスト教を語ることがありますが、そのキリスト教は「復活者の発見」に基づくキリスト教ではない、何か別の物でしょう。

二三人彼の名において——彼の名目名義(キリスト教)によってではなく、現実(復活のイエス)への志向性(うめき、憧れ、欣求)を以って——集るところには、「我もまた在るなり。」と彼は言い給うのです。

——最後に、ペテロに言われました。「(ほかの誰彼を云々するのでなく)あなたがわたしに従って来なさい」(『ヨハネ』21・22)と。

(『Bambino』第5号、1966年11月)

註

- 1) その当時日曜集会を終えて私とともに川西や能勢の山野に繰り出したのは、安土亮、野瀬純郎、後藤収、の諸君であった。
- 2) 神学者カール・バルトはある所で、キリスト教会は主イエスに対して元々、何も積極的な貢献をしていない、と告白している。神学はこの「告白」から始まるのである。現代的に言えば、これは私見だが、「リーマン破綻」(2008年9月15日)に関連してグリーンズパン前米国FRB(連邦準備制度理事会)議長が、10月23日の米下院の政府改革・監視委員会における公聴会で、デリバティブの

規制緩和については「金融機関の自己利益の追求が、株主や株主資本を最大限守ることになると思いこんだ点で過ちを犯した」と証言した時、近代資本主義数世紀の代表的「罪の告白」をしたのだ。

現代における「告白」と「回心」

自己利益（貪欲）のデリバティブ商品による手の込んだ追求が、どうして社会益に還元できるのか、どうしてそのような所に「神の見えざる手」が働きうるものか、——グリーンズパンの「大告白」《Great Confession》は、欧米キリスト教石油資本主義文明の「罪の告白」である。もしも、この告白が本物の告白であれば、「罪人達の赦し＝再派遣（Re-missio Peccatorum）」が生起しよう。それは、私の信ずるところ、トマス・ベリーの言う「エコ生代」《Ecozoic》（注。エコロジーを命とする時代）開幕への回心の形を取ることであろう。

そして、そのうごき——全地球的な運動——に東洋からは芭蕉や良寛の俳諧哲学の智慧が新鮮な貢献をすることであろう。全地球的なエコゾイック運動も、詩歌的芸術的側面をもたぬならば、抽象的理念的社会改革に流れるからである。我らは今日、日本の「kawaii」文化（アニメ文化）の奥底に控える、芭蕉＝良寛的詩歌哲学の凄みを世界に訴えるべきだ。Cf. my essay “Thomas Berry in Dialogue with Whitehead, Basho, and Ryokan,” in: Herman Greene, ed., *The Ecozoic: 151 Tributes to Thomas Berry* (Church Hill, NC: Center for Ecozoic Studies, 2009), pp.195-199.

- 3) ピェール・テイヤール・ド・シャルダン「問題の核心」, 全集第五卷『人間の未来』340頁＝クロード・トレモンタン, 美田稔訳『テイヤール・ド・シャルダン』東京・新潮社, 1966年, 116頁に引用。
- 4) シャルダン「人間エネルギー論」, 全集第六卷『人間のエネルギー』192頁＝トレモンタン前掲書, 120-121頁に引用。
- 5) シャルダン「物質の核心」『神のくに』——トレモンタン前掲書, 121-122頁に引用。
- 6) 15節の「これら」(Gr., touton = Eng., these) は、「これらの物」であって「これらの人々」ではない。なぜならば、後者と取れば、イエスはよほどいけすかない人であって、ペテロの仲間、つまり兄弟弟子、との比較において、ペテロに愛と忠誠の熱意を試していることになるからである。この箇所は、日本聖書協会1954年改訳では、「ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか。」、新共同訳では、「ヨハネの子シモン、この人たち以上

にわたしを愛するか。」となっていて、いずれも誤訳である。これでは、宇宙の万象以上に復活者を愛する、というキリスト教的福音の本来の意味がかき消されてしまっているのではないか。おそろしいことである。

「これらの物」の意義

Cf: “That seems unlike Christ. It was not his way so to handle people, so to harass a fallen and repentant man, fretting his sore, or so to pit one of his followers against the others, and still less in these others’ presence. And so some think that Christ’s question meant—‘Once on a day I called you, Peter; and then you responded, rose up at once, left all, and followed. But you are back at the old life again. And are you going to abandon me? Are you pulling out of the adventure? Having put your hand to the plow, are you now looking back? Do the old ties tug at your heart? And are they drawing you away from me? Or do you still love me more than these? You must decide between them and me; today, in this old familiar place. You are in danger of deserting. That is why I am here.’” (Arthur John Gossip, *The Gospel According to St. John, The Interpreter’s Bible, Vol. 8*, New York and Nashville: Abingdon Press, 1952; “Exposition,” p. 806.)

Cf. also: “Does, then, *agapas me pleon touton*: mean ‘loves thou me more than these things?’ *sc.* the boat and the nets and the fishing, to which Peter had returned after the Passion and the Resurrection of his Master. This interpretation is, indeed, unattractive; but it may possibly be right, and it is free from some difficulties which beset the usual interpretation.” (J.H. Bernard; ed. A.H. Mcneile, *A Critical and Exegetical Commentary on the Gospel According to St. John*, Edinburgh: T. & T. Clark, 1928, 1958, p.705.)

7) 有名なセーレン・キェルケゴール著『反復』は、超越者からの人生の受け取りなおしを主題として書かれた。だが、具体的きっかけは彼の婚約者レギーネ・オルセンとの「婚約破棄」後の「関係の回復」の期待であった。それは（レギーネの幼い頃からの家庭教師フリッツ・シュレーゲルとの婚約の決断により）満たされなかったが、「反復=受け取りなおし」という哲学的主題は不朽の主題として確立したのである。その主旨は以下の如くである。

反復論

「反復の弁証法は容易である、なぜかというに、反復されるものは存在していたのである、でなければ反復されないであろう。ところが、それが存在していたということが、かえって反復をなにか新しいものにする。ギリシア人が、すべての認識は追憶である、といったとき、彼等はそれによって、現に存在するところの全現存在は現に存在していたのである、といおうとしたのである。人生は反復である、といわれるとき、それは、現に存在したところの現存在が今や現存在となる、ということの意味する。追憶もしくは反復の範疇がなければ、全人生は空虚な、内容のない空騒ぎに帰してしまう。追憶は異教的な人生観であり、反復は現代的な人生観である。反復は形而上学の関心事である。しかし同時にそこで形而上学が座礁する関心事でもある。反復はあらゆる倫理的な観方の合言葉である。反復はあらゆる教義上の問題の欠クベカラザル条件である。」(『反復』榊出啓三郎訳、岩波文庫、1959年、38-39頁)

キェルケゴールは「現存在となる」ということで何を意味したのか。一度起こったことであっても、新しい現在においても一度現存在になる必要がある。プロセス神学では、このことを「俱現」《concrecence》と呼ぶ。キェルケゴールの時代にはこの事態をヘーゲル哲学の用語で「可能性の現実性への移行」と呼称した。新しい現在は、「現存在となること」「生成」であり、それをキェルケゴールは「反復」の主題として省察したわけである。

私自身の哲学的態度から言うと、この事態は「潜在的人が現実的ないし現在的人となる」プロセスである。このプロセスには、「移行」（ないし推移）だけが含まれているのではない。「現在的人となる」という自己創造的活動が発揮されているのだ。これがホワイトヘッドで言えば、先程の「俱現」である。「俱現」は過去との関係において見れば、潜在的人の現実的現在的人の反復であるが、同時に逆に、超越者との観点から見れば、先行する超越者（本説教の主題で言えば「復活者」）の御手から「宇宙人生を受け取りなおすこと」に他ならない。そうでないと、キェルケゴールのギリシャ哲学批判がもろに当て嵌まる。つまり、単なる過去の追憶でしかないのだ。

21世紀の第十年目の今日(注。本註執筆時の2010年)、地球上の全人類は、リーマン・ショック(2008年9月15日)の「二番底」に惧れをなしている。この状態は、哲学的に考えれば、現在を過去によって規定されたものだけ見ていることから、招来される心的境位だと言える。「先行する超越者(本説教の視点から言えば、「復活者」)の御手より宇宙人生を受け取りなおす」純正キリスト論的思考態度が全然見られないのだ。

親鸞論

現在、非常に影響力のある、作家五木寛之氏の運命論にしてが、「率直に言えば、ルネッサンス以来の魂の大恐慌です。ヒューマニズムという人間中心主義の思想が、いま根底からくつがえろうとしている。何百年に一度の心の大恐慌（デプレッション）が、いままさに幕をあけたのです。」（『歎異抄の謎』東京・祥伝社、2000年、9-10頁）と言うように、この点「追憶」的考察態度に過ぎ、「反復」的視点が不十分である。私自身は、拙著草稿『哲学の喜び——チェンジの時代に、根底を示す滝沢語録を読む。』（2009年10月8日脱稿）において、私の根源的哲学原理「原事実の『新しい現在』の生み出し」を発見した。原事実を、本説教におけるように「復活者として現れる」と取るならば、現在は、「潜在的過去の人が現実的現在の人となる」プロセスからだけでは十全の形で捉えられないのであって、必ず同時に、原事実の復活者としてののはたらきによる、「新しい現在」の生み出しと、錯合しているのである。こんにち、「復活の省察——『宇宙人生もう一度』の宇宙論的キリスト論的神学」が緊要である所以なのである。

*

我が大発見——ヨハネ福音書17章5節は「主の祈り」の原典・原型である！

この点、最近の説教的思索「御名を崇めさせ給え——主の祈りの不思議」（於日本キリスト教団東新潟教会、2012年8月26日）では、「原事実の自覚」（過去の現在化）と「復活者としての現われ」（未来の成就）とのあいだに「ケノーシスの主の祈り」（現在の現在化）を見出したことは、大発見であった。この発見は、すでに記したように、ヨハネ福音書17章5節が、マタイ福音書6章9節に記された「御名が崇められますように。」という主の祈り第一捧の「原典」「原型」である、という判断を根幹とするものである。

これが私にとっては、1970年代初期から、「イエス・キリスト・インマヌエル・アーメン！」なる称名キリスト論となって定着して久しい。「イエスはキリストであるとは、神我らと共に在すとの意義である。誠に然り。」と訳す。

三つの「・」（なかぐろ）の意義の問題

重要なことだが、「イエス・キリスト」の只中にある「・」は——ヨハネ17・5の主の祈りで読めば——インマヌエルの原事実即太初の栄光のイエスによる「自覚」即栄光を輝かし給えとの「主の祈り」をあらわす意味で、イエス・キリストの只中における「インマヌエル」を表す。次に、「キリスト・インマヌエル」の只中の「・」は、万物万人の根底の消息という意味を表す、それ

が「インマヌエル」だということである。使徒パウロで言えば、「我もはや生くるに非ず、キリスト我が内（根底の場所）に生くるなり。」（『ガラテヤ』 2・20）ということになる。第三に、「インマヌエル・アーメン！」の只中の「・」は、「我々による自覚と祈り」を表す。ホワイトヘッドの言う「主観主義原理」の事態である。ここでは、インマヌエルは「絶対的客観的事実」（滝沢）を脱して「我々における・又我々による・その自覚と祈り」に移行している。

称名のダイナミックス——栄光から栄光へ

いずれにしても、ここにあるのは、パウロ的表現で言い表わせば、「栄光から栄光へ」（『第二コリント』 3・18）の事態である。初めの栄光は、主イエスの事としてのそれ（純正キリスト論的栄光）である。二つ目の栄光は、我々の事としてのそれ（称名キリスト論的栄光）である。そして、あいだに「天地の展開」としての「から」が来るのである。ホワイトヘッド流に言えば、「实在の現象の統合体への転移」（“the Reality which the Adventure transmutes into its Unity of Appearance”: *Adventures of Ideas*, New York: The Free Press, 1967, 295）ということである。誠に、パウロも記す如く、「わたしたちは皆、顔蔽いなしに、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主のはたらきによるのである。」この「主のはたらき」こそ本稿を第十九章として収めることを企図している新著『受肉の神学——救済論と形成論』第二篇「受肉の神学——形成論」の動力である。そして、この動力による「栄光から栄光へ」のかたちの転移（transmutation）こそ形成論の心なのである。この心がどんな実質を秘めているのか、我々はつぶさに窺うことであろう。

信仰から信仰へ

因みに、「信仰から信仰へ」（『ローマ』 1・17）という原則は、宗教改革者マルティン・ルターの新しき義の発見の中で見極められたのであったが、主イエスの信仰（『ローマ』 3・22）から信徒の信仰へという意義において、ここで我々が見ている「栄光から栄光へ」という転移とパラレルである（『受肉の神学』第一篇第二部第三章参照）。前者は「救済論の原則」であったが、後者は「形成論」の心なのである。この心を詠うものにして、称名ほどのものはないのである。

称名の在ること実にも有難しこれで初めてこれで終るよ

(ここに挿入した「親鸞論」以下省察五段落と一首は、2013年2月8日記す。)

最後に、先述の「復活の省察」の神学から見た浄土真宗論の文脈に取って返して考えるならば、以下の考察は重要である：キリスト教に見るのと同様の事態は、浄土真宗の場合、『歎異抄・後序』にある親鸞の「つねの教え」と称される重要な一句「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。」を過去から発しつつも、あくまでも未来的に親鸞に先行するところの現在包含的願と捉えうるならば、我らの「復活の省察」と照応しよう。もしも、五木氏によるように、これを——その「阿弥陀仏のお誓いをよくよく考えてみると、つくづくそれは自分ただひとりにむけての救いのお心であつた。」(五木著、125頁。傍点引用者)という「私訳」に明らかなとおり——過去のみにだけ取るならば、「復活の省察」との「反復」的照応関係はない。親鸞理解における、ケルケゴールのいう意味での「追憶」的立場が出ているだけだ。

付論Ⅱ：一つの詩『ペテロ』

ペテロ——自問

ペテロは泣いた
男泣きに泣いた
もうまったくありったけを泣いた
夜明けを告げる鶏の音が
すべてがもう取返しのつかないことを
教えていた

俺はやっぱりサタンなのか
決定的な時にあの人を裏切ったのだから
それまで俺は注意に注意を重ね
絶えず「頑張れ、俺よ、ペテロよ
お前は巖ではないか、恐れるな、なにも
勇を鼓して行け、あの人に続いて」
とおのれを駆り立ててきていたのに
ああ、あの瞬間俺の魂はギクッとして
飯炊き女の質問の前で
何ということだ、もろくもかぶりを振っていた
「よし、今度は！」とおのれを奮い立たせるひまもなく
ついに三度も否認を繰返してしまっていたのだ

ああ、もう、俺は去った
俺のなにもかもがガタガタに崩れている
救い主と仰いだあの人死刑に赴くと知った時の
あの俺の凍るような絶望！

実に、絶望ほど恐ろしいものはない
それは魂を無底にした
いくら鼓舞しても駄目だった
不意に弱かったのだ、不意に！
ぬけっからになった魂は、おのれ！
つねに裏切りのチャンスだったのだ
だが、何故だろう、これは？
俺はまったく崩れてしまっているのに
俺を下からコツと支えるものがあるではないか
これは何だ？ これは？
ああ、そうだ、あの人の言葉だ
俺のすべてを見抜いていたあの人の！
あの人は俺の裏切りまでを言い当てられた
ということは、裏切りの俺を受容れるのが
あの人だということではないか
ああ、主よ、そのあなたを
わたしは確かにはっきりと裏切りました
遁れ得ぬ事実！
恐ろしい事実！
わたしはこうしてわたしを失って
ただもう泣いている以外ではないのです
泣いている以外ではないのです

第二節 ペテロ——帰郷

師の処刑という悲劇に殴られ
ペテロはゴルゴダのような心で
故郷ガリラヤに帰ってきた
同じ湖

同じ舟
同じ網だ
あの人に出会う前と
一体全ては悪夢だったのか？
いや、いや、事実だ
主の死という事実
俺の裏切りという事実なのだ
遁れ得ない！

第三節 ペテロ——不作と見知らぬ人と仕事の回復

その朝
何も獲れなかった
結実のない人生そのもの！
仲間とうな垂れて帰ってきた
呪われてしまっているような俺たち！
夜はまだ明けない

と、その時
見知らぬひとりの人が呼びかけた
「どうだね、獲れますかね？」
「いえ、何も、まったく、何も」
絶望の心たちは答えた
「君たち、舟の右の方に網をおろしてみろよ
何か獲れるよ、きっと」
見知らぬ人の加勢の声
絶望の心たちは仕事の励ましに
何よりの親愛を感じて立上る
さあ、もう一度だ！

網を投げる
水の音
しぶき
食い入る眼（まなこ）
眼（まなこ）
眼（まなこ）
網を引く
重い
重いぞ
それ引け
引きあげろ
大漁だ
歓声が湧きあがる

第四節 ペテロ——新しい朝 「あれは主だ！」

夜が白々と明ける

突然、彼らの記憶が甦る
俺たちの生活へのかかる参加者は
おお、主、主ではないか！
一人が叫ぶ
ペテロ！ あれは主だ！
おお！
何たる歓喜！ 何たる奇蹟！
飛び込み水をかきわけ
泳ぎ進む ペテロ
ペテロは

第五節 ペテロ——共食

陽はあかあかと昇る
車座の彼らはこの人を見つめる
魚の焼ける匂いが鼻をつく
水面が金色に光る
煙にむせる者の咳
火がパチパチとはじける
誰も何も尋ねない
彼らは食べている

第六節 ペテロ——「これらの物以上に私を愛するか」

目はペテロを見つめた
声がかっきり青い空のように
語りかけた
「ヨハネの子、シモンよ、お前は
これらの物以上にわたしを愛するか？」
すべてが破れたままのずぶ濡れのペテロ
は答える
主よ、そうです、あなたをご存知です
わたしがあなたを愛していることは——
「わたしの小羊を養いなさい」

第七節 ペテロ——「わたしの羊を養いなさい」

海が光る
潮風が彼らの髪を乱す
声がまた響いた
「ヨハネの子、シモンよ、わたしを愛するか？」
さらに破れたままペテロは

魂を出すほかはない

主よ、そうです、あなたをご存知です

わたしがあなたを愛していることは――

「わたしの羊を飼いなさい」

その言葉がはらに達し

ペテロは失っていた仕事をもう一度握る

しかし、裏切りが彼の心をつよくつよく噛む

その時、主はもう一度言われた

「ヨハネの子、シモンよ、わたしを愛するか？」

ペテロは三度の裏切りのおのれが

三度呼ばれていることに気づいた

主よ、あなたはご存知です

わたしがあなたを愛していることは

主よ、すべてお分かりになっています

「わたしの羊を養いなさい」

第八節 ペテロ――「ペテロよ、ペテロ」

ペテロ、ペテロよ

お前は一度自我で歩いた

ペテロ、ペテロよ

だが、お前はやがて手を十字架上にのばす

ペテロ、ペテロよ

鎖につながれ、ひきたてられるのは

お前だ！

わたしに従ってこい

ペテロよ、ペテロ

第九節 ペテロ——「さあ、復活の朝だ！」

ガリラヤの海は静かだった
彼らはみな黙々と朝の食事をした
彼らの古い仕事場が今もう一度
新しい仕事の出発点になろうとしていた

さあ、復活の朝だ
毎朝、毎朝がそうだ
あの方がつねに俺たちの車座の
一員でいらっしゃる
極悪非道の裏切り者
絶望の洞窟の住人の俺さえ
今も、この今もだ
ヨハネの子、シモンよ
あなたはわたしを愛するか、と
呼んでらっしゃるのだ
呼んでらっしゃるのだ
だから、世界の全てが暗くても
一番底から明るいんだ¹⁾
だって、俺こそその証人なんだから
——ペテロはこう言いつつ
それから後の毎日を
一歩
一歩
彼のゴルゴダへと
歩いていったのである

(『Bambino』第22号, 1968年6-7月)

註

- 1) 「一番底から明るいこと」を、聖書的には、「わたしたちの主イエス・キリストによって、神は感謝すべきかな。」(『ローマ』7・25)と言うのである。この感謝は、我々人間の実存の根底が主イエス・キリスト、キリストの根底が父なる神、我々の根底「キリスト」から、キリストの根底「父なる神」に至るまで、「宇宙の通路」で在するのが「初めに在ったロゴス」「神と共に在すロゴス」なる「インマヌエルの原事実」(滝沢克己)だから、我らは遂に、「御前に近づく」(『ヘブ』19・22)のである——死を超えて近づくのである——から、当然のことである。

繰り返す。「神は感謝すべきかな。」と言うのは、当然なのである。死を超えて「光の王国」に近づくことが、キリスト信仰の極致であることを知らない人(当のキリスト教徒を含めて)が多すぎる。

何故、皆さん、陰気な顔をしているのか?! 生きていて死ぬまでの精神修養がキリスト信仰だったら、どうということはないではないか。そこには、まったく宇宙的事件はない。精神的事件があるのみだ。

我々は、皆さん、「世が造られる前に、ロゴスが父の御傍で持ち給うた栄光」(『ヨハネ』17・5)に共に与るのである。これが我々の輝く未来の希望なのである。この希望なしに、一体、何のキリスト信仰なのか。宇宙論的に言えば、この希望は、我々の住んでいる、ビッグバン以来の偶発的宇宙を突き抜けて、永遠的宇宙(イエスの神学の言う「天にまします我らの父」のその「天」,「隠れたるにいます父」のその「隠れたる所」)に至ることなのである。そのような「巨大な希望」あってこそ、ペテロは殉教の死に向かって歩むことを躊躇しなかったのである。たかだか数十年の我らの生涯が終わって、それで敬虔に悟りきって the Endなんてのは、キリスト教ではない。「ここ」を信じないから、皆さん、精一杯できることは、最大限、家族孝行だけなのだ。だが、ほんとうの家族孝行、親孝行は、希望の王国を示すことではないですか?!

(2010年10月25日これを記す。)

Three Reflections on the Spirit of Establishment:

Liberty and Love as Seen From the Viewpoint
of a Theology of Loyalty

Tokiyuki NOBUHARA

Abstract:

St. Andrew University has derived its school motto from Jesus' words of calling: "SEQUIMINI ME" (Mk. 1: 17). Following Jesus like Andrew did, thus, became the spirit of establishing St. Andrew University which is interpreted as signifying, at least within the context of the idea of a university, "the spirit of liberty and love." Professor Teruso Taniguchi's essay, "Possibilities of the Paradigm of 'World Citizens': Concerning the Questions of How to Interpret and Apply St. Andrew University's Spirit of Establishment," is brilliantly demonstrating the way in which 'world citizens' can only make sense within the context of the "Christian love of each and every one" (John 3: 16) thus accountable in the sense of "active [or freely decision-making] citizens who embody an active citizenship."

I take Professor Taniguchi's endeavor to represent a reinterpretation of the ontological truthfulness of the gospel from the perspective of a sociological integration of the given society in terms of "loving each and every person." The ontological significance of the divine love, as manifested in John 3: 16, has to come out freely and compassionately within a sociological reality of "world citizenship." If that is really the case,

it means that the ontological significance of the divine love has its own inner urge toward such an active embodiment.

The inner urge of the divine love has appeared in the Easter event in terms of what I call “RE-MISSIO PECCATORUM” (namely, forgiveness / resending dynamics which is at work in the sinners or the disciples who once failed to follow Jesus). In what follows I will discuss the dynamics of RE-MISSIO PECCATORUM in a threefold manner: first, missiologically in reference to Leslie Newbigin’s understanding of mission as composed of “mission,” “missions,” and “evangelism”; second, in terms of interreligious dialogue (esp. Buddhist-Christian dialogue) by reference to my proposal of a theology of loyalty; and third, homiletically, by reference to my sermon “RE-MISSIO PECCATORUM” and its poetical articulation, “Peter.”